教職課程センター紀要　第４号　103-106 ページ、2019 年 12 月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.4 103-106, 2019

研究ノート

地域を生かした「総合的な学習の時間」の指導

Teaching method of comprehensive learning period utilizing the local community

猪俣　修

OSAMU INOMATA

Key words:　地域活用，子どもの意欲，地域連携

はじめに

１.「総合的な学習の時間」のねらい

１９９２年に小学校低学年の「生活科」が全面実施になり、２０００年に高学年及び中学校での「総合的な学習の時間」が導入された。

導入時には、大きなねらいとして

１．自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること

２．学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

３．各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かして、それらが総合的に働くようにすること

これらの三つががあげられていた。

総合的な学習の時間が導入された当時は、多くの学校現場で、生徒が主体的に考える力の育成と教科の横断的な取り組みを重要な課題として指導計画を立てていたが、国や県からは具体的なことについては特段指示は出されていなかった。ただ、当初は修学旅行や合唱コンクール等の特別活動における学校行事に関する取り組みについては、それまでの特別活動としての取り組みの時間確保として使われることをよしとしない方向での指導するようにという助言がなされた。学校現場では年間行事の組み立てにおいて様々な活動の時間を確保することは大変だということで、「総合的な学習の時間」を行事等の特活の準備時間として活用したいという要望があったが、活動主体にすると、「総合的な学習の時間」で設定したねらいが達成できなくなる。

そのため、各学校では地域の特色を生かすように意識し、試行錯誤しながらそれぞれの学校での取り組みを作りだしていた。

２　所沢での実践例として

「総合的な学習の時間」の導入に合わせて様々な課題に対して試行錯誤して学習指導案を作成していた時の一例としてあげてみると、所沢の中学校では、地域と子どもたちの興味関心に沿って課題を設定する取り組みが生まれていた。

「となりのトトロ」は所沢の地名が複数出てるものとして、子どもたちが実地調査をすることに適している内容であったと考える。「松郷」や「七国山」等のアニメに出てくる昔の所沢の風景を実際に探し、写真を撮ってきてアニメの場面と比較することによって今と昔の所沢の変化について考察する活動には子どもたちは意欲的に取り組んでいたし、パワーポイントでのプレゼンテーションにも工夫がこらされたものが多かった。また調べ活動をしていく内に、歌人三ヶ島葭子の碑を発見し、義弟の俳優で「老人とこそものポルカ」でも有名な左卜全についても新たな発見をするといった学習に発展していった。また市街を探索すると「若山牧水」の碑や明治天皇が宿泊した「行在所」を見つけてきたり「航空発祥の時代の写真」を保存している写真館等、子どもたちが当初予想していたよりもたくさんの発見が生まれた。

「総合的な学習の時間」の設定当時からパソコンを使った発表形式を取り入れることが推奨されていたが、実際にはコンピュータ室の割り振り等では今ほど十分な設備や機器の数はなかった。それでもコンピュータ室の設置等は進められていて、技術科以外でも活用することが多く見られた。

現在では、学校行事の取り組みについても学習のねらいが明確になっていれば「総合的な学習の時間」として取り扱うことが認められることも多くなってきており、

いくつかの学校では「総合的な学習」の時間が当初の限定的なねらいよりも内容を広く捉えて運営されているところも見られるようになってきている。

子ども達にとって充実した学習にするための十分なねらいや、子どもたちの興味関心を元に学習を深める内容にしてくと、授業準備や課題設定等にも多くの時間や労力をさかなければならない。しかし現状では様々な実務や事務作業の多さで、教師の方に豊かな取り組みを生徒に提示する余裕がなくなってきているのではないかと考える。

そのような中でもきちんと「総合的な学習」の時間を充実させようとした場合、ある程度のひな形を作成して、どこの地域でも取り組むことが出来る内容を提示することが多くなってきてるのではないだろうか。その理由として毎年毎年新しい内容の創造をするほどの余裕が学校現場にないことがあげられるが、精選された内容は蓄積された資料によってどの教師にも指導できるというメリットがある。

一例として所沢の向陽中学校の「総合的な学習の時間」の指導計画をあげてみると　※１

総合的な学習の時間の目標 育てようとする資質や能力及び態度 自分の生活と地域の事象とのかかわりについて探求する方法を身に付け、そこに潜む問題を主体的、創造的に見出し、他者と協力して問題解決するとともに、よりよい社会を作り出そうとし、自己の生き方について考えることが出来るようにする。

という目標に合わせて各学年での指導計画を作成している。

第１学年での学習課題は「富士山について学ぼう」「働く人々から学ぶ」「１年間の活動のまとめをしよう」である。情報を収集選択し、処理・発信の方法を学ぶことをねらいとするが、校外学習で訪れる富士山の自然環境の学習をすることによって、富士山ができた歴史や樹海・宝永火口・富士山の環境問題や生息する動物等についての事前学習を元にそれぞれの課題を新聞や発表会という形で「総合的」な学習の活動を組み立てていっている。また「職業について学ぶ」活動についても「社会体験チャレンジ」によって職場体験してきたことの活動を振り返り課題や成果をまとめ、発表している。

第２学年では、「課題設定」のためにいくつかの講座を選択し、研究テーマを自ら設定できるようにし、研究計画を立てている。

「日本の古都、世界の古都」「日本の世界遺産」「江戸の人々」「伝統と現在の文化」「衣服の生い立ち」「日本の宇宙開発」「浮世絵とゴッホ」等、教師の方でも資料収集やレクチャーをしやすい内容を多岐にわたって設定し、選択できるようにしている。ただ、１月に行われる修学旅行に向けて学習を深めていきたいので、日本の歴史的な内容の提示が多くなっている。課題設定のための学習講座や自分たちで探して集めてきた資料、インターネット等で得た情報を分析し整理し、そのまとめをプレゼンテーションソフトやビデオ映像等を活用した発表会を行っている。

後半は関東で多くの学校が修学旅行地と考えている「京都・奈良」に対して「日本文化の再確認」としての事前学習として扱うことも出来るようになってきている。そこで、「近畿地方の言葉と文化」「仏像」「寺社」「幕末の京都」「京都の名産とは」「世界文化遺産」「国際交流を深めるためには」などの課題を提示して、事前学習をより深める活動にしている。

もちろん国語、社会、外国語、美術などの学習との関連を図りながら学習計画を進めている。

第３学年では、課題設定として前期では「福祉について」をあげている。

DVD 鑑賞や講演会、「障害者疑似体験」を実際に行う等の取り組みをすることで、学習を深めるきっかけを作っている。後期では「私たちのくらしと地球環境」というやや大きい課題設定で、身近な環境問題に目を向けようという取り組みを行っている。

所沢市内では一時期「ダイオキシン」の問題が取り上げられ、「トトロの森」や「おおたかの森」等、環境保護を意識しないと廃棄物であふれてしまう現状を考える場所がいくつもある。身近なところから大きな問題へと意識化させていく課題を３年生では設定している。

この課題設定は、所沢でなくても使える汎用性の高いものになっていて、現状の「総合的な学習の時間」のあり方としては工夫されているものと考える。

しかし、総合的な学習としての多くのあり方は、ここまでもいっていないところも見受けられる。

教員の過重労働の問題が提起されている昨今、より負担の大きい取り組みを求めることは難しいのではないかと考えるが、生徒にとって学ぶ価値のある「総合的な学習」にしていくためには、教師の時間保障も必要ではないかと考える。教師や学校に時間的・予算的なゆとりがあれば、より豊かな「総合的な学習の時間」を生み出す

ことが出来るのではないだろうか。

３　岩手の地域の力を生かした「総合的な学習の時間」

大変な状況でも豊かな実践を組み立てている例はある。地域や身の回りのことから学習の内容を見つけていき、さまざまな現地での調査や経験等を実施して考えを深める２０１７年の全生研全国大会で提起された岩手の熊谷実践等から、総合的な学習についてのあり方を考えてみたい。　※２

熊谷実践では子どもたちにとって身近な地域である一関市の地域振興について、一関市を「日本で暮らしたいまちトップ１０にしよう」という課題にそって自らが探してきた気になることをテーマ設定している。一関市がより住みやすい町にしていくために課題を解決するためにどのようにするかという話し合いを重ね、具体的な政策立案をしている。そしてそれが実現できるかどうかという見通しを持つために、その内容に関わる市議や弁護士等、様々な外部の人たちに講師として来てもらって学習したり、議会や商業施設等に出かけて調べていくという取り組みである。

熊谷実践の総合的な学習の内容は

「ステージ１」として

①テーマ設定、計画づくり

②実態調査、懇談会、市議会見学

を実施している。

話し合いによって「まちをトップ１０」にするにはどうしたらよいかを話し合って学習するグループを作っている。

生徒の関心は、イベントやＰＲ活動を積極的に行って一関を知ってもらうことや大型ショッピングセンター誘致などを考えることが最初は多かったが、職場体験での高齢者福祉施設での体験をした生徒たちが、福祉施設や医療施設をもっと増やしたほうが暮らしやすい町になると考えたり、ログハウスを建てて移住してきた人への聞き取り調査等を進めたり、一関市にも待機児童の問題があったりすることを学んでいくうちに、社会的な問題に生徒の関心が移っていく。

「私のお母さんの会社では差別がひどい」という母親がフィリピン人の生徒の言葉から「ブラック企業をなくすために」どうすればいいかを話し合い、最低賃金の問題や雇用の問題、市民税のことにまで学習が深まっていっている。

２学期に入ると法律相談会と市議会の議員との懇談会を実施している。夏休みに弁護士に来てもらい、弁護士との法律相談会を行った。生徒が考えた地域振興政策を行うにあたって、法的にクリアしなければならないものを質問したり、身近なトラブルについても法律相談をする機会を設けて学習を深めている。翌週には千厩選出の市議会議員３人を招いて懇談会を行った。各議員には事前に１３グループの政策案が書かれた学習シートを渡しておいて、それぞれの政策についてコメントをもらったりした。

９月には、議会の一般傍聴に三日間かけて、学級ごとに参加し傍聴してきた。修学旅行でも国会を傍聴していたのだが、市議会はより身近な議題を話し合っていることで、わかりやすかったようである。この取り組みに対して、市長に質問を出し、市長からメッセージが発せられるという機会もあった。

「ステージ２」として討論会、請願書づくり、模擬市議会等、自分たちが考える「日本で暮らしたいまちトップ１０」にするために、本物の議会や弁護士に指導してもらったことを生かし実際にどのように進めていくかということを中心に学習を組んでいっている。

９月には弁護士７人を招いての討論会を行った。１４のグループが模擬議会用に作成した一般質問通告書に対して、質疑応答するという形式である。弁護士には２つのグループのアドバイザーとして入ってもらい、生徒に多面的に考えるヒントをもらった。

１０月には、模擬市議会に向けた選挙を実施し、それぞれの振興策を述べて投票するという形をとって学習の発表を行っている。

子どもたちの考えから出たものを、弁護士や議員に来てもらい､専門の大人たちからのアドバイスをもらって、より質の高い学習にしていっている。

課題としては市や政策を行う側からの目線での課題設定になってしまっているので、もっと住民から出される要求の視点等の多面的な要素があるとより内容を深めることは出来るのかと思う。しかし、地域や多くの人たちに協力してもらう体制づくりから、この実践から学ぶことはたくさんあると考える。

４　豊かな学習にしていくために

岩手の熊谷実践で見るように、一関市を魅力的な町にするための具体的な政策を選挙公約という形にして、生徒が有権者として市民感覚を持って相互評価するなどの工夫のように、発表の形も生徒たちの意欲を喚起するものにしていくことも重要な意味を持つと考える。このように自主的な発想による学習活動を生み出す取り組みを

組織していくことが「総合的な学習」のねらいを達成するために良いのではないかと考える。

発表の形態についても、どのようにしていったら子どもたちが能動的に取り組むことが出来るようになるかということを考えると、今は中学校で実施している所が減少している「文化祭」等の形を復活させることも一つの考えとすることができる。時間がかかりすぎるということで効率を求めるだけでなく、活動の意義をとらえ直すことが有効ではないかと考える。

以前は多くの学校で見られたのだが、特別活動の領域に入る学校行事の中で、文化的活動の代表的な取り組みである「文化祭」でクラスでテーマを決めて学習したことを発表するということがあった。しかし行事の精選を行うにあたり、そういった文化的・学習的な行事を行うところが少なくなってきている。文化祭についても「文化発表会」といった能動的な活動ではなくなっている所も見られる。文化祭では自分たちで調べたものを模造紙に書いたり、様々なものを作って表現していたが、それを学習の発表と捉えると、文化祭のような形で総合的な学習のまとめを行うことも有効ではないかと考える。

文化祭での発表の仕方で「段ボール文化」であったり「模造紙文化」と批判的に言われることがあるように、時間をかけて学習して学んだことをどのように発表するかという課題があり、「総合的な学習の時間」として発表することで、より多様な発表形式やパソコン等を使用することが考えられ、将来のプレゼンテーション力を伸ばすことにも繋がっていくようにできると考える。

「文化祭」に取り組むことにすると自分たちで行っていくという意識を持つことができると思うが、そのことを否定的に捉えることが多く見られたのではないだろうか。時間をかける割に効果的な学習が出来ていない、深い学習になっていないのではないかと思われることがあり、文化祭に比重をかける学校が少なくなっていたのではないかと考える。

現在、子どもたちが主に経験している行事は体育祭や合唱コンクールといった勝敗や順位付けを伴うものは残っているのだが、文化祭はそれぞれの課題を見付けたり、自分で工夫して学習したことを発表する経験が少なくなっている。しかし、「文化的な行事」と「総合的な学習」との共通点は多いと考える。

「総合的な学習の時間」の課題としては、ねらいにあわせた学習への準備の時間が多く必要になるという点である。子どもたちの学習の意欲や学習内容の向上を求めるならば、総合的な学習の時間にかける教員の人員、または協力してくれる学校外のボランティア等や準備や活動をする時間を十分に確保する必要があると思う。

忙しすぎると言われている現状を少しでも改善できれば、子どもたちにとって豊かな学習にしていくための教育条件作りができるのではないだろうか。

「総合的な学習の時間」の充実のための条件作りから考えていくことと、身近なものから考える課題を、地域の人たちの力を借りることによって深めている実践をいくつも集めて研究することで、よりよい「総合的な学習の時間」を進めていくことができると考える。

※１　所沢市立向陽中学校「総合的な学習」年間計画
※２　全生研第 59 回全国大会紀要